ある病院における混沌の心理力動

～Bion集団論に基づく考察～

The psychodynamics of chaos in a hospital:
A discussion from the perspective of Bion's group theory

平　尾　浩　子

Hiroko HIRAO

要　約

本稿は、ある精神科病院におけるスタッフ内に見られた混沌について、Bionの集団論における基本的概念（基底的想定グループ、作動グループ）を導入することにより、グループの状況を整理し、内容を深く理解しようとするものである。

Bionの集団論は、治療場面における臨床的問題を理解するのに役立つと言われているが、治療場面のみならず、日常生活の中で目撃する現象にもBion理論を当てはめて、集団の情緒的な現象を深く理解することができるということを本稿で示したい。

Key words：Bion、基底的想定、作動グループ、スケープゴート、依存

Ⅰ．問題

筆者が以前勤務した病院は、精神科単科の病院であり、患者の病態としては分裂病圏、神経症圏が半々である。筆者はこの病院で心理士として勤務していた。ある時期、この病院ではスタッフの中でさまざまな現象が起き、そのため病院としての業務が滞ったり、正常に機能できない時期があった。グループの状況は周期的に変動するが依然として続く混沌とした状況を理解することは困難であり、不可能と思われた。

W.R.Bionは英国における集団精神療法の先駆者である。Bionの集団論における概念は治療グループのみならず、社会における集団を理解するために適用することができる。Bion（1961）によれば、グループはしばしばそのメンバーの意図や意識にかかわりなく一つの単位として機能するものであり、個々のメンバーよりもむしろ全体としてのグループを観察することにより特定の事実に新しい意味を持たせることができるという。

本稿の目的は上述の問題と思われる現象についてBionの概念を導入することにより、集団の情緒的状況を深く理解しようとするものである。

手順としてはまず問題について時期ごとに内容をそれぞれ詳しく記述し、背景となる理論を紹介する。次に仮説をたて問題の現象を理論に基づき考察する。

Ⅱ．事例

上述したように病院における問題とみられる出来事を、内容により次のように四期（第一期：繋がりのビーズ、第二期：占いごっこ、第三期：スケープゴート、第四期：不可能性への試み）に分け、時期ごとにそれぞれの現象を詳しく述べることにする。

第一期：繋がりのビーズ

この病院では、患者向けのサークル活動として手芸講座を開催している。参加者は全て女性で、週に１回手工芸に関する手作業を行ってきたが、ある時若い人の意見を取り入れて、「ビーズ手芸」をやってみようということになった。

事前にサークル活動スタッフ（女性３人）が、ビーズ手芸を得意とする事務スタッフに、制作上の指導を受け、活動当日はサークルのスタッフが、参加者に指導するという方法で準備を整え、ビーズ手芸講座の当日となった。参加者は、10代から70代まで女性ばかり17人。この日は手始めに比較的簡単に出来るブレスレットを作った。作品は短時間で仕上がり参加者は作品を身につけそれぞれ満足気だった。ビーズの持つ煌めき、豪華さは宝石に近いものがあり、女性なら誰でも虜になってしまうほどの雰囲気がある。

以後、携帯電話のストラップ、指輪、ネックレスと、数ヶ月間に渡り、手芸講座の中でビーズ手芸が主流になった。スタッフはいろいろな作品を

毎回教えるためには、その都度、熟練したスタッフに作り方の指導を受ける必要があり、サークル活動のスタッフのみでなく、次第に事務のスタッフ数名（女性）も交えて、みんなで作るようになった。最近流行っている作品は凝ったものが多く、ビーズの大きさや種類も様々であり、参加者が作りやすいよう、予め試作品を何種類か作っておく必要があったのである。又作品づくりは仕事の一環であるという前提のため、病院の開院時間中に受付兼事務室で手のあいた人が作る、という暗黙の了解が出来、自分で買った材料や作り方の本を持ち込むなど、作品作りは日ごとにエスカレートして行った。さらに、患者全体にサークルのことを宣伝するという理由から、できあがった作品の指輪をはめたまま受付に立つ人も現れた。

ビーズの材料は、洋菓子の空き缶や箱を利用して4つぐらいに整理され、仕事場の棚の上のすぐ目に付くところに置いてある。ある時スタッフの1人が、

「何かやる気がしないのよね。」

と言いながら、何気なくビーズの箱の所へ行き、手にとってふたを開けた。すると普通に仕事をしていた他の数人のスタッフも「待ってました」とばかりに寄ってきて箱の中をのぞき込み、誰からともなく作品を作り始めるのであった。

以後毎日のように、同じような現象が起き、誰かがビーズの箱を手に取りふたを開けたとたん、居合わせたスタッフは自動的に、誰からともなく作品を制作してしまうのである。はじめは躊躇していた人も強くすすめられ、ついにはスタッフ全員が勤務時間中にビーズを制作するようになり、できあがった作品は身につけて見せ合いながら、お互いにほめあうというパターンが繰り返された。身につけない人には必ず誰かが身につけるよう促した。

ところがビーズ制作を始めると、来院の患者には背を向ける格好になるため、徐々に仕事への支障が出始めた。また、先の予定で、スタッフの親

睦会が予定されていたが「その時には、全員がビーズの作品を身につけていこうね」という合い言葉まで云われ始めた。

ビーズ手芸を始めてから３ヶ月ほどして、仕事場の棚の上が、更に増えたビーズの箱で一杯になってきたので、主任の指示により片づけようということになった。ビーズ関係の箱は、事務室のとなりの備品室に全て移動させた。以後ビーズのことは、グループの話題から離れつつある。

第二期：占いごっこ

ある時、「姓名判断」など占いに詳しい非常勤の男性医師が新しく赴任した。スタッフはこの医師に関心を寄せ、何かを期待するかのように噂をし合った。しばらくして医師の好意により診察後の時間を利用してスタッフ向けに「姓名判断教室」が開かれるようになった。個別に「判断」を受けたスタッフは、翌日その過程の一部始終を一人ずつ皆の前で詳細に報告し、グループは笑顔で頷きながら熱心に話を聞くという一定のパターンが毎週繰り返された。

病院ではこの医師以外にも、新たに非常勤の医師（男性）が次々と採用されたが、再びスタッフはこの前の医師と同じようにその医師たちに注目し、彼らの情報を出来るだけ集めようとした。
当初の医師は、姓名判断を一通り終えると次は「手相」、「骨相」、「顔相」等他の分野の占いをさらにスタッフに提供し続け、そのたび判断を受けたスタッフがその結果を翌日皆（グループ）に報告するという形が際限なく繰り返された。

このような中、いつのまにか病院全体に「素人占い」がはやり出し、やがて受付の仕事場の机の上には、様々な占いの本が大量に並べられるようになった。中でも生年月日等を元に個人を動物に当てはめ 、性格や相性、人生について占う「動物占い」や「犬占い」が特に人気を集めた。病院の

事務室はまるで社交場のような明るい雰囲気に包まれ、スタッフたちはこの占いを利用して、非常勤の医師についてさまざまな情報を得ようとしていた。又、これらの医師たちの勤務中の一挙手一頭足が、それを目撃した人によって詳細に報告されたが、その都度グループはそれらの内容にじっくり耳を傾け、まるで何かを判断するためにその作業を繰り返しているかのようだった。

第三期：スケープゴート

病院の受付のすぐとなりは診察室となっており、ふだんここでは非常勤の医師が診察を行っている。ところがこの部屋は受付とカーテンひとつを隔てただけの構造であるため、どうしても受付の声や音などが伝わり常にざわざわとした落ち着かない雰囲気の中で、医師は診察をしなければならない状態であった。

病院では実習生（男性）を受け入れていた時期があり、ある日事務室で実習生がスタッフと和気あいあいと話をしていた時、となりの診察室からいきなり医師によるメモが渡された。メモの内容は、患者が男（実習生）の声がうるさいと言っている、というものであった。ところが当の実習生と受付のスタッフたちはそのメモの意味がわからないという状態であったが、実習生に対する否定的な意見があるということがグループの中に強く印象付けられた。

その後実習生は予定通り研修を終え病院を去ったが、その頃より病院のスタッフの間でひどい咳が続く悪性の風邪がはやり出した。件の医師が治療に当たったが、実習生が研修時に特徴のある咳をしていたことを思い出し、彼が感染源であろうという診断を下した。その後もスタッフは強い症状に見まわれ、長年病気をしたことのない健康なスタッフをふくめ次々と病に倒れ、全員が回復するまで二ヶ月ほどを要した。この間グループの中で

は実習生に対する否定的な感情が満ち溢れ、更に強いものへと膨らんでいった。この間病院より連絡事項のため何度か実習生に連絡を取ろうとしたが、彼は行方の知れない状態となっていた。

第四期：不可能性への試み

病院では新たな事業を立ち上げる計画があり、そのためにある試みがなされた。それは外部より有能な人材を迎え入れ、新規事業の推進と院長業務の補佐役を任せるというものであった。やがて院長がかねてより信頼する人物が選ばれ、数日後彼は着任し皆の歓迎を受けた。彼はまじめで控えめだが、経営面においてはプロであるという鋭い面も併せ持った人物であった。スタッフはその人物が、現在自分たちが置かれている不満や混乱状態をもまるで「魔法のように」解決してくれる人物として期待し彼に協力しようとした。彼はすぐさま新規事業拡大への見通しを立て、それに伴う院長の業務を整理し、又補佐内容についての検討などに向け専念しようとした。グループは一見すると新しい組織形態の中で機能しはじめたかのように見えた。彼は冷静に着実に動いたはずであった。

しかし彼にとって病院業務は未知の分野であるためその遂行は事あるごとに妨げられた。又病院に堆積していた業務上の問題の多さも相まって、その遂行は困難をきたした。結局彼はまず病院業務を理解することから始めねばならず、当然スタッフに依存せざるを得ない状態となった。一方スタッフは期待に胸ふくらませ彼に依存しようとする悪循環の依存状態がしばらく続くことになった。

Ⅲ．背景理論と仮説

1．仮説

以上、ある病院の中に起きた問題とみられる現象を四期に分けそれぞれを詳述した。これらの現象についてグループの個々のメンバーに注目するのではなく、全体としてのグループを観察することにより特定の事実に新しい意味を持たせることができる。これらの現象は一見するとつながっていないように見えるが、その関係をみた時、この混沌の状況はBionの集団論における基底的想定によるものであると考えられる。

さてここでBionの集団論について簡単に網羅したい。

2．Bionの集団論

まず背景となるBionの集団論における基本的概念について述べてみたい。Grinbergら(1977)によれば、Bionは「多数の人間が集まって１つの課せられた仕事をやり通そうとする時に、二つの方向が生ずる。１つはその仕事の成就を指向し、他はその反対を指向する。作業はより退行的、原始的活動のために妨げられる」（P.16）とし、前者を作働グループ、後者を基底的想定グループと名付け次のように説明した。

作動グループ Work groupは、「幾年もの修練をもち、精神的発達を可能にする経験をつむ能力を持った人にのみ可能である」（Bion,1961; P.137）といわれるように、誰でも容易にこの状況になれるものでは決してない。各人の非常な努力と協力によりはじめて可能となる。従って作業を中心とした成員の協同は不可欠であり、活動は課題に向けられているため常に現実を意識し、合理的な方法がとられることになる。さらに欲求不満に耐えることができるので新しい理念の進展が可能となる。

基底的想定グループ basic assumption group とは、基底的想定と呼ばれる、強力な情緒的衝動によって形成されるグループであり、前者とは対照的に各個人の協力や能力は要求されず、「即時的・不可避的でしかも本能的なものである。」(Bion,1961; P.147) この基底的想定は任意の時点で、グループ内における全員一致の意見が存在するというものであり、これによりグループが採る機構や、課題への対処法などが決定される。基底的想定の活動に関与している個人個人の意志はなく、まるで「自分の意志によって導かれることを停止した自動人形」のように振る舞うしかないとBion (1961) は、Lebonを引用しながら述べている。

基底的想定グループは原始的な部分対象に密接に対応しているため、原始的な関係に所属する精神病的不安が現れてくる。このため基底的想定グループにおいてはMelanie kleinの記述による早期の精神病的 (特に妄想分裂的) 態勢における防衛過程 (原始的理想化、分裂、投影同一化、否認) によって特徴づけられる (Klein,1955; Segal,1973)。

基底的想定は、Bion自身のグループ経験に基づいて「依存基底的想定」「闘争／逃避基底的想定」「つがい基底的想定」の 3 つに分けられる。

依存基底的想定 (basic assumption of Dependency=baD)

Bionによれば、baDの特徴はグループが「物質的・精神的な援助や保護のために依存しているリーダーから支持を得ようとして会合する」(Bion,1961)。従ってグループは未熟で非力な存在であり、有能なリーダー (治療者) に頼らなければ自身では何もできない「かのように」ふるまう。baDの特徴としては、外界は非友好的で冷たいものであると感じること、リーダーの理想化 (全知、全能化)、批判的判断の欠如と受け身制、極端にどん欲 (greedy) な方法で知識、援助を要求、個人間相互作用の欠如などがあげられる。

闘争／逃避基底的想定（basic assumption of Fight/Flight＝baF）

Bion（1961）によれば、闘争と逃避は、「集団が何者かと闘い、あるいは何者からか逃避するために会合する」(P.147) という常に内・外の敵を意識したグループの信念であり、一般的には二つの正反対の反応であると理解されている。Bion はこれを同一のコインの裏と表のように考え、悪い対象に対する唯一の防衛的活動は、それを破壊する（闘争）か避ける（逃避）という行動をおこすと説明した。したがってbaFの第一の特徴としては、グループ内・外における敵（scapegoating）の存在があげられる。グループの闘争的な側面としては疑惑、非難、言語的攻撃、怒りであり、逃避的な側面としては、受け身的抵抗、沈黙、集団の作業の回避である。

baFグループにとって必要なことは集団が生きのびることであり、そのために個人を犠牲にすることがある。グループは逸脱者が出ることを脅威と感じるため、個人が順応するように圧力をかける。逸脱者に対してグループは、攻撃的な操作とスケープゴーティングによって逸脱を阻止する。

つがい基底的想定（basic assumption of Pairing＝baP）

Bionによれば、baPグループにおける最大の特徴とは「希望的な期待」を持つことであり、たとえば「結婚が神経症状を終結させるであろう」(Bion,1961）というように言語表現されるものであるが、ここでグループにとって重要なことは「神経症状の終結」という結果ではなく「希望の感情」そのものである。グループの目的は「希望がかなうこと」ではなく、「希望を持ち続けること」であり、この「希望」はしばしば２人のメンバー（つがい）に託される。グループは自らが抱えている不安や恐怖を解決してくれるであろうリーダー（救世主＝必ずしも人間とは限らない）を産んでくれるであろうという希望的な期待を抱き、つがいの話にじっと耳を傾けるのである。このためグループの雰囲気は他の基底的想定とは違って幸福感や楽観、親しみのある明るいものとなる。

変則形態（aberrant forms）

基底的想定は永続的な現象ではない。グループは作動グループによって引き起こされる不安や恐怖を既存の基底的想定で処理できないと分かると、他の基底的想定に頼るようになる。しかし見られる変化は新しい基底的想定による変化以外の場合もある。

Bion（1961）によればグループが新しい考え方との葛藤が起こった場合、グループが反応して外部のグループの参加を必要とするような新しい形の機構を生み出すことがある。この反応は変則形態と呼ばれ、その結果グループの雰囲気や役割が変化することになる。

グループが欲求不満の状態にあるとき、状況を改善する試みを重ねたり話し合うなど一見してグループが新しい段階に入り、作動グループに変化したように見えるが、グループの欲求不満をただ「魔法のように」解消することのみを目指しているこのような一時的な変態は、「変則形態」にすぎないものといえる（Hafsi,2000）。

3．Bion理論からみた病院の混沌

以上、Bionの集団論を簡単に網羅した。次に前述した事例について、ここでも四期に分けそれぞれをBionの集団論に基づいて検証してみることにする。

第一期

第一期では、スタッフグループにおけるビーズ手芸に関する様々な出来事を述べてきた。ここでのグループの第一の特徴は、「作業の回避」である。明らかに「ビーズ手芸」の魅力により、常に「仕事」より「ビーズ手芸」を選んでしまっている。第二の特徴はグループの逸脱に対する攻撃的コントロールである。「ビーズを作るグループ」に入ることに抵抗を示す人に対

しても、「入りなさい。さもなければ許さない。」というグループの無言の圧力により、まずスタッフグループの全員をビーズグループに引き入れ、次に出来上がった作品を身につけるよう促したり、「食事会の時にみんなビーズの作品を付けて行こう」というような申し合わせをする事により、グループはビーズでつながりを持とうとしたことは明らかである。これらの特徴はBionの記述に示されているように「闘争／逃避基底的想定」に支配されているときの特徴である。

さらに「私達はみんな一緒にすばらしいグループをつくっているんです。だからグループに入り、とどまるべきである。」というメッセージが含まれているこのグループの状況は、Anzieuのいう集団イリュージョン（illusion groupale）に相当すると考えられる。

Anzieu（1984）によれば、集団イリュージョンとは「ある時期に生じる融合的な多幸感をさし、そのさい集団内の全成員はともに一体感を感じ、良いグループをつくることに喜びを感じる」（P.24）ということである。Hafsi（1990）は、この集団イリュージョン概念は、Bionによる闘争／逃避基底的想定の一部であると考えられるとしている。

第二期

次は占いが流行った第二期についての検証である。「占い」や非常勤の医師が話題になるときは、常に希望に満ちた明るい雰囲気が漂っている。また新しい医師についての話が語られるときは、常に語り手と医師の「二人」を意識した語り方であり、グループはその二人に注目し、期待をしながら、黙ってじっとその話に耳を傾けている。まるでその二人がグループの待望する救世主を生んでくれることを期待するかの様にである。

このように、希望、幸福感、親しみに満たされたグループの雰囲気や、常に二人のメンバーを意識し、その二人がグループを救ってくれる救世主を産んでくれることを期待するという様子は、Bionによれば「つがい基底

的想定」に支配されている状態ということが出来る。

第三期

第三期はスケープゴートについての内容であった。この時グループはグループの中に敵を作り出す必要があり、実行した。一人の人間を共通の敵と見なすことにより、グループはまとまろうとしたのである。スケープゴートが作り出されたのは、あたかも医師個人の考えのようにおもえるが、グループがそうさせたのである。このようにグループが攻撃すべき敵がいる状況は、Bionによれば「闘争／逃避基底的想定」に支配されているときの特徴であると言える。

第四期

第四期では外部からの事務長の就任に関する出来事を述べた。この時期グループは事業拡大という名の下、新しい考えとの間の葛藤を回避するために外部の別の基底的想定を代用しようとした。このような過程は、新しい変化を求め、外部から新しい動きを取り入れたことで、新しい段階に入ったように見えるが、実際はこのグループにおいて依存の心性が変化することはなく、結果的にグループは何も変らなかった。グループは違った顔を持つこと（違った体制になること）により一見変化したように見えるが、組織の中身としては何も変化していなかった。

Bion(1961)によれば、このようにグループの欲求不満を解消することのみを目指している一時的な変態は、「変則形態」であるといえる。

グループによる事務長迎え入れの試みは、画家のRene　Magritteの有名な絵、「不可能性への試み」La Tentative de l'impossible,1928　と同じく無意味なものに過ぎなかったのである。

Ⅳ．考察

本稿においてある病院の混沌について検討を行った。まず背景となるBionの集団論について紹介し、次に混沌の内容について検討を試みた。即ち、第一期では、グループは仕事から逃げるためにビーズ手芸に没頭し続けたので、闘争・逃避基底的想定に支配されていたといえる。第二期ではグループは占いを通じてグループを救ってくれる救世主の誕生を期待する状態であり、つがい基底的想定に支配されている状態であったといえる。第三期では、グループはグループ内に敵（スケープゴート）を作り出しひとつにまとまろうとした。よって闘争・逃避基底的想定に支配されていたといえる。第四期では、グループは新しい考えに対抗するために新しい組織形態を作り出し、グループが変化したように見えたが、実際は何も変化せず変則形態に過ぎなかった。以上のようにある病院の混沌は、Bionの集団論による基底的想定の影響によるものと考えられる。

本稿ではある病院におけるグループの混沌をより広く深く理解するためにBion集団論の概念を用いて考察した。Bion（1961）は、集団論の学説が「集団のメンバーとしての日常生活の中で人々の目撃することのできる現象に対し、はたして意味を与えるものであるかどうか、各人自らがそれを決定することのできる立場にあるであろう。」（P.184）と我々を刺激する。Bionの集団論は治療場面のみならずごくありふれた日常の出来事について用いることが可能であり、本稿においてもこの理論を導入することによりグループ内に現れる種々の緊張を明らかにし、グループ状況の中で発展した混沌に秩序を持たせることができた。

参考文献

Anzieu, D. : *Le groupe et Imaginaire groupal. Paris* : Bordas, 1984. (榎本譲訳 :集団と無意識、言叢社、1999).

Bion, W. R. : *Experiences in groups and other papers.* New York : Basic Books, 1961. (池田数好訳：集団精神療法の基礎、岩崎学術出版社、1973).

Grinberg, L., Sor, D., Tabak de Bianchedi, E. : Introduction to the work of Bion. truns. A. Hahu. Scotland : Crunie Press, 1977. (高橋哲朗訳：ビオン入門、岩崎学術出版社、1982).

Hafsi, M. : Beyond Group and irrationality : Bion's Contoribution to The Under-standing of the group 奈良大学大学院研究年報 第4号, 1999.

Hafsi, M. : 「基底的想定グループ」再考ー「退行」から「思考」への転換ー. 集団精神療法、16 (1) : 75-82, 2000.

Hafsi, M. : The leadership function in training groups : A psychoanalytical approach to group dynamics. *Psychologia,* 33, 230-241. 1990.

Klein, M. : Notes on some schizoid mechanisms. In *Developments in Psychoanalysis.* London : hogarth Press, 1955.

Lebon, G. : *The Crowd:study of the Popular Mind. London*:Benn, 1947.

Segal, H. : *Introduction to the Work of Melanie Klein.* London : Hogarth Press, 1973. (岩崎徹也訳：メラニークライン入門、岩崎学術出版社、1977).